

作話から共感へ —ウジェーヌ・ミンコフスキーのベルクソン受容—

佐藤 愛

精神病理学者であるウジェーヌ・ミンコフスキー (Eugène Minkowski, Eugeniusz Minkowski 1885-1972) がベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の哲学に多くを負っていることはよく知られている。しかしながら両者の思想的関係性については、これまで、意外なほど具体的に論じられて来なかった。したがって本稿では、ミンコフスキーによるベルクソン受容について、ミンコフスキー自身の論述をたどりながら確認することを目指す。手続きとして、まずミンコフスキーの経歴からベルクソンの著作を読み始めた時期を確認する。次に、初めてミンコフスキーの論文のなかにベルクソンの概念が明確に現れる、1920年代に発表された論文の内容を検討する。続いて、『生きられる時間』(1933年)におけるベルクソンについてのミンコフスキーによる言及を確認する。そして、同著作のなかでミンコフスキーがベルクソンから離れようとした箇所とその理由について分析した後で、最後に、ミンコフスキー自身の意図を超えてなおベルクソンを受容した「相互補完 (complément)」の思考を、ベルクソンとジャネ (Pierre Janet 1859-1947) の「作話 (fiction, fabulation)」、さらにはベルクソンの「共感 (sympathie)」概念の分析から示したい¹。

1. ウジェーヌ・ミンコフスキーの経歴について

まず簡単にミンコフスキーの経歴を確認したい。ウジェーヌ・ミンコフスキーは1885年にサンクトペテルブルクでポーランド系ユダヤ人の両親のもとに生まれた²。その後故郷であるポーランドに家族とともに渡り、ロシア帝政下でロシア語による教育を受けるも、ポーランド語での教育を望む学生たちの蜂起に巻き込まれる。これによりウジェーヌは兄とともにポーランドで医学を修めることが困難となり、ミュンヘンへ渡る。また医師国家試験のために向かったミュンヘンからロシアのカザンへの道中で、後に彼の妻フ

ミンコフスキーの略歴

1885年	サンクトペテルブルクに生まれる。
1892年	家族とともにワルシャワに移る。
1905年	兄ミエテクとともにミュンヘンへ渡る。
1908年	ミュンヘンで医学を修める。
1910年	ロシアで国家試験を受験する。(当時ポーランドはロシア帝政下にあったため)
1911-12年	ミュンヘンでインターンとして働く。
1913年	チューリッヒでプロイラーの助手となる。
1915年	フランスに渡る。
1927年	『精神分裂病』初版刊行。
1933年	『生きられる時間』刊行。
1936年	『コスモロジーへ』刊行。
1941年	ユダヤ人の子供を助ける活動 (OSE) を開始する ⁴ 。
1943年	パリでミンコフスカとともに拘束される。
1950年	ミンコフスカが亡くなる。
1953年	『精神分裂病』再版。
1956年	ミンコフスカの『ロールシャッハ』を死後出版する。
1963年	同じく『ファン・ゴッホ』を死後出版する。
1966年	『精神病理学概論』刊行。
1968年	『生きられる時間』再版。
1972年	気管支肺炎で亡くなる。

ランソワーズ・ミンコフスカ (Françoise Minkowska 1882-1950) となるフラニア・ブロックマン (Frania Brokman) と出会う³。1913年には、ミンコフスカの紹介で「早発性痴呆」と呼ばれていた病に「精神分裂病」の名称を与えたオイゲン・ブロイラー (Eugen Bleuler 1857-1939) の助手となる。しかしながら1915年には、当時彼らにとって最も安全だったはずのスイスを離れ、フランスに渡る。パリ北部郊外のエヴラル病院 (Hôpital de Ville-Évrard) で数週間働いた後、1915年秋から第一次世界大戦に参加し、後に市民権を得てフランスに定住する⁵。(フランスに渡ってからの活動については、上に表をまとめた。)

ミンコフスキーの生涯を見渡したときに最大の謎となるのは、1915年のフランス行きの決断である。われわれはこのフランス行きの決断が、哲学的関心—特にベルクソンへの—に基づいて行われたとみなす。この仮説について、本稿において少しずつ明らかにしたい。

2. 1920年代の論文

ミンコフスキーによるベルクソンへの言及が初めて公になるのは、アメリカの医学誌に掲載された論文「精神病理学に適用されたベルクソンの思想」⁶ (1926年) によってである。しかしながら、それ以前の論文においてもすでにベルクソン受容の痕跡が見られる。1921年に発表された論文「精神分裂病と精神疾患 (ブロイラーの著作におけるその概念)」⁷では、「精神分裂病」とは「現実との生きられる接触 (le contact vital avec la réalité)」の喪失であるという定義が初めて発表されるのだが、ここでは「生きられる (vital)」という語が「空間的な (spatiale)」とは区別される語であるということが述べられている。この論文の内容をさらに確認してみよう。ミンコフスキーは「接触」という語について、次のように述べる。

この接触は、結局、生の本質以外のなものでもなく、われわれの内的世界と外的世界の間にある相互的な行為と影響の絶え間ない満ち引きのなかにある⁸。

ミンコフスキーによれば「精神分裂病」において失われる「現実との生きられる接触」とは、このように、内的世界と外的世界との接触であり、われわれと「環境 (ambiance)」⁹との接触であるとされる。

この「接触」に関しては次節で『生きられる時間』の記述からさらに検討するとして、次に、ミンコフスキーが同論文のなかで使用して以来消去する、「深い核 (noyau profond)」と「表面の層 (couche superficielle)」という語の対に注目したい¹⁰。

〔精神分裂病の患者の表現は〕深い核のときには、現実からすっかり引き離されながらも、その〔深い核の〕特徴を表面の層に染み出させているのであり、表面の層を貫きながらその〔深い核の〕存在を表現している。〔この深い核の表現は〕沈黙し、不動である。一方、表面の層のときには、現実の方を向き、現実を身を任せ、漂い、外部からの刺激に反応するに任せている¹¹。

このようにミンコフスキーは、「精神分裂病」の患者の、沈黙して自閉的な態度と、刺激や知覚に過敏に反応する態度を比べながら、彼らの「深い核」と「表面の層」の時間を対置する。これらの語の使用に関し、近年の思想史研究においてヴァスは、ベルクソンの逆円錐についての精神分裂病論における受容があるとみなしている¹²。

さらにヴァスは、これら「深い核」や「表面の層」といった語が、その後ミンコフスキーによって使用されなくなる背景に、1922年のミンコフスキーによるブルクヘルツリ病院への短期の帰還が関係しているとする。もちろん当時、ブルクヘルツリにはブロイラーがいたのだが、ヴァスは、ミンコフスキーがこの滞在によって、「深い核」と「表面の層」を、ブロイラーの「同調性」と「分裂性」の対に置き換えたとみなす。さらにヴァスは、これに伴ってベルクソンの「記憶」の問題を、ミンコフスキーが自身の精神分裂病論から取り去ってしまったことを指摘し、この点においてミンコフスキーを批判する¹³。

しかしながら、事はそう単純ではない。なぜならミンコフスキーは確かに「核」や「層」といった語を使用しなくなるが、「深い次元」と「表面」の対については以後も保持し続けているし、さらには、「記憶」の問題についても取り組もうとしていたからである。次節以降では、特に後者の問題に留意しながら、『生きられる時間』におけるベルクソンへの言及を整理したい。

3. 流れとしての時間

まずは、『生きられる時間』におけるミンコフスキーによる時間の定義について確認したい。ミンコフスキーは『生きられる時間』の序文において、1914年の7月の第一次世界大戦における総動員の前には、「質的時間の本質的諸要素」に関する一つの研究を成し終えていたと述べる (TV 4)。ではミンコフスキーは「時間」について、ここでどのように定義したのだろうか。ミンコフスキーは第一章第二節の冒頭において、「時間とは何か」を問い、次のように答えている。

それは、ベルクソン流にいうならば、わたしが時間について瞑想するときも、わたしの周囲に、わたしのうちに、つまり至るところに、わたしが見るところのものであり、この「流動する塊^{マス}」、動く、神秘的で、壮麗で、力強い海洋 (océan) である。それは生成である。(TV 16)

このようにミンコフスキーは、ベルクソンにならって、時間について、これが空間化を拒む純粹な流れ、すなわち「生成」であるとまずは定義する。

時間は原初的な現象として、常にそこにあり、生きており、われわれのまったく身近に、すなわち、時間のなかに見分けることのできるすべての具体的な変化よりも限りなくわれわれに身近な現象として現れる。(TV 16-17)

ミンコフスキーは時間を「生成」として定義し、さらには、時間が認識 (connaissance) にとって接近不可能な現象であり、常にそこにあり、生きられており、限りなく身近な「一つの全体」としてあるとする。かつ、この全体がわれわれの眼前にすでに「与えられている」と述べる。

ここで問題にしたいのは、時間という現象に関し、われわれの思惟がまったく相対的で不十分である、ということでは決してない。われわれは何らかの積極的なものを目の前にしているのであり、かくしてわれわれは、生成の現象と推論的思惟の手続きとが、根本的に相容れないことを確認するのである。(中略) 生成は認識にとって接近不可能である。というのは、生成が認識されるものの背後に留まるからではなく、それがいわば完全に与えられていて、その本性に関して、推論的思惟の領域に属するいかなる問題をも提起しないからである。(TV 18)

「原初的な現象」としての「生成」は、われわれの目の前に「完全に与えられて」おり、この生成に対して認識 (や知性) は接近不可能であるとされる。しかしながらここで注意したいのは、彼が生成をとらえられないはずの推論的思惟や因果律に基づく思考法と、生成をとらえるための直観や洞察に基づく方法とを、「分裂性」と「同調性」の二大原理として、自身の精神病理学のなかで並立させようとする点である。本稿では、こうしたミンコフスキーの方法の一部を、停止と流れ、空間と時間、さらには作話による停止と前進といった組から提示したい。

4. 停止する場所

では、ミンコフスキーは流れとして時間を定義しながら、どのようにしてこの停止を肯定していくのだろうか。この問題について検討するために、彼が当時反駁しようとした時間論を振り返りたい。ミンコフスキーは、『生きられる時間』においてテオドル・ツィーエン (Theodor Ziehen 1862-1950) の名前をあげながら、彼の「停止する場所」のない時間論を批判する。ツィーエンは「刺激」、すなわち彼が「感覚」と呼ぶものが、物理的に神経に残存することによって心的イメージや観念が引き起こされると考える。ツィーエンにしたがえばミンコフスキーが彼を念頭に置きながら「表象」と呼ぶものもまた、「感覚」と同様に純粋に物質に還元されるものである¹⁴。しかしながらミンコフスキーがツィーエンの「生理学的心理学」を批判するのは、このように「感覚」や「表象」が純粋に物理的・化学的なものとされるからではない。では、ミンコフスキーはツィーエンの心理学のどのような点に対し異議を唱えたのだろうか。ミンコフスキーの引用に戻ろう。

それは全部間違っている。停止する場所は存在する。われわれは皆それを知っている。存在の各瞬間に、われわれは観客になることができる。われわれの使命はそこにあるくらいである。それはわれわれが生において果たすべき本質的な企ての一つである。

(TV 14)

ここでミンコフスキーは、ツイーエンによる「感覚」や「表象」の目まぐるしい時間論に抗おうとする。上で確認したように、ツイーエンは心的イメージや観念を時間的に以前の刺激の残留物としてとらえていた。ツイーエンにしたがえば、記憶の経過は以前の刺激の残留から説明されることになり、時間は感覚の残留の堆積物でしかなくなる。したがって時間の流れは、感覚とそれについての表象が生じては消えていくという各瞬間の繰り返しでしかなくなってしまう。そうすると、われわれは永久に新たな感覚、すなわち刺激を受容し続けることでしか時間を生きられなくなってしまうのである。そこでミンコフスキーは、このような時間論に対し、「われわれは、ツイーエンがそれを望むように、時間をもっぱらわれわれの意識の多様な要素の間断なき継起としてのみ生きるということはありません」(TV 14-15) とし、われわれが、ツイーエンが言うところの感覚とそれについての表象の連鎖から時間を生きるのではなく、存在の各瞬間ごとに「停止する場所」に立って、それを静かに眺めることができると主張する。すなわちミンコフスキーは、われわれの生を眺め、観想 (contempler) や反省 (réfléchir)、省察 (méditer) を可能にする支点が存在するという立場に立つのである。

ミンコフスキーによれば、われわれは「停止する場所」を持っている。この場こそが、ツイーエンへの反駁の根拠であり、ミンコフスキーが時間論において立つ支えとなるものである。この「停止する場所」について、さらに詳しく確認してみよう。『生きられる時間』において、ミンコフスキーは瞬間に関して、次のように述べている。

非常にしばしば、われわれは、瞬間ごとに、絶え間なく、常に、外界や内的生命の出来事に関する新しいイメージを眼前に形成しながら、時間の現象が、一種の万華鏡カレイドスコープに変えられたのを見る。このようにして、渦動、自失する疾走、絶え間ない継起の観念が生に取って代わる。これはわれわれの持つ反省と省察の必要に対して、ごく僅かでも安定した、どのような支点も与えない。(TV 14)

ミンコフスキーはここで、目まぐるしく継起する各瞬間から、時間について論じることを拒否している。これはツイーエンの時間論に対する批判であり、彼はこのようなものとして時間をみなすことを、時間が万華鏡に変えられてしまった状態として退けようとする。ここで確認しておきたいのは、「万華鏡」がしばしばベルクソンによって使用される比喩でもあったという点である。

ベルクソンは『物質と記憶』(1896年)において、「作為的分割 (*division artificielle*)」¹⁵ について、万華鏡の比喩を用いながら次のように述べている。

どのようにしてわれわれは物質的延長の原初的に看取される総体としての連続性を、それぞれ、実体と諸個体とに分割するのだろうか。なるほどこの連続性も、瞬間とともに様相を変化させる。しかしながらなぜわれわれは、あたかも万華鏡を回転したかのように、全体が変化するということを、そのまま単純に認めないのであろうか。なぜ全体の動きのなかに、結局、運動する物体のたどった跡を探すのか。すっかり変化しつつもまた留まっているところの動的連続性は、われわれに与えられている。なぜわれわれは恒常性と変

化というこの二つの項を分解し、恒常性を物体によって、変化を空間における等質的運動によって表象しようとするのだろうか¹⁶。

ここでベルクソンは、なぜわれわれは「全体」が万華鏡を回転したときのように「変化する」ことを単純に認めないのか、と問いかけている。しかしながら他方ではこのとき、「動的連続性の全体」はすっかり変化すると同時に、また「留まっている」とも述べる。ミンコフスキーは、ベルクソンから投げかけられたこのような「変化」と「恒常性」の並立の問いに対し、すでに見たように、万華鏡の比喩が「行き過ぎた動力学主義」(TV 14)を示すものであり、これが「停止する場所」を持たないからこそ、退けられるべきであると答える。しかしながら、「停止する場所」についての検討を深めるなかで、下で見るように、もう一度万華鏡の比喩を検討し直す。そして、目まぐるしい万華鏡の比喩を認めてもお、われわれには流れる時間のなかで反省を可能にする「停止する場所」が存在すると主張し、推論的思惟と直観との往復を通じて、自身の精神病理学を展開しようとする。

5. 空間の取り上げ直し

ミンコフスキーは「ベルクソンの哲学に忠実に」(TV 19)時間について定義したいと欲し、「空間と同一視される時間」であるために、「行き過ぎた静力学主義」としての不変の時間を退けるとともに、「行き過ぎた動力学主義」であるところの万華鏡的な時間に対しても距離を取ろうとする。しかしながらミンコフスキーは、これらの1) 空間と同一視された時間と、2) 目まぐるしい時間の両方に、恒常性と変化を同時に肯定するために再び接近していく。

まずは、1) 空間と同一視された時間について見てみよう。ミンコフスキーは、ここまでは確かに、空間と同一視された時間を批判したのだが、続いて、空間の「安定」的な側面を認めることによって、生きられる時間には空間の概念が結びつけられているのではないかと改めて問うようになる。

このようにして、時間の内的本性に入り込もうとするすべての研究において、背景に空間の観念が、無言の、しかし不可欠の端役として現れるのを、われわれは見るのである。
(TV 20)

ミンコフスキーは『生きられる時間』の第一章第三節以降において、「停止する場所」の視点に立つことによって、一度退けた「空間化された時間」を取り上げ直す。すなわち、空間概念を「無言の、しかし不可欠の端役」として認めることによって、時間の経験についての検討を拡大しようとするのである。

われわれは、ベルクソン自身が『創造的進化』においてしたように、生物学的現象という形式の下に、時間よりももっと安定しもっとしっかりした一つの基体を時間に与え、

このようにして自然界の事実連鎖の輝かしい概観 (aperçu) を獲得することもできるだろう。しかし同様に、純粋な現象の領域に留まろうと努めることもできる。推論的思惟と直観との間、空間と時間との間に、互いに還元し難い対立を確認することによって、われわれが押しこめられたと思っている袋小路の奥に、ひとつの出口が隠されていないだろうか。(TV 19-20)

すでに確認したように、確かにミンコフスキーは時間が生成であり、一つの基体であるとしていたが、ここではこれが生物学的現象、すなわち生物の進化という視点の下にはなかったという点に注意を促す。そうすることによって、一つの全体であるところの生成が、前進の「輝かしい概観」の働きではなく、「現象の領域」に留まることによってのみ与えられるとし、推論的思惟と直観との間にあった「袋小路の奥」へと進もうとする。

こうした「現象の領域」に留まることの要請から、ミンコフスキーは、2) 万華鏡的な目まぐるしい時間をも取り上げ直しているのだから、これについて確認しておきたい。万華鏡の比喻に関連して言及されるのは、「疲労、失望、落胆」(TV 20) といった、「自然界の事実連鎖の輝かしい概観」としての生物学的前進に対しては、一見すると否定的で、後退的に働くような「現象」である。

われわれは万華鏡のイメージを退けた。しかしながら、このイメージはそれを描いたものの精神のうちに生じることができたのである。なるほどそれは本当の時間ではないであろうが、しかしそれにも関わらず、おそらく時間の一つの様相なのである。それではいまやわたしは、事象の継起の観念から出発して、問題の万華鏡を心の内に再構成できることを認めるのだろうか。然り。この万華鏡を単に表象するばかりではなく、さらにそれをはるかに生々しく経験することが、しばしば自己に起こるのである。疲労、失望、落胆のときには、すべてが束の間、儂い、つかみどころがないものに思われる。(TV 20)

ここでミンコフスキーは、一度退けた2) 万華鏡的な時間に再び接近する。万華鏡はミンコフスキーにとって、目まぐるしく、変化し過ぎるものであり、儂く、つかみどころのないものである。しかしながら、確かにわれわれは「疲労、失望、落胆」の時間を生々しく経験するのであり、ミンコフスキーにおいては、こういった「特殊な様相」と「空間」概念の取り上げ直しとは連なったものであり、これらが「袋小路の奥」(TV 20) へ進むことを助けるという。

ミンコフスキーはここで、自身が経験した「生々しい」経験の例をあげる。彼は第一次世界大戦中に塹壕で過ごした際に、「時間の単調さ」に打ちひしがれるのだが (TV 12)、一方では、こうした時間が、生のなかでは過ぎ去るものでありつつ、確かに存在してもいるという確信を得る。

生命が、わたし自身の生命も、わたしの周りに流れる生命も、現実時間にともに逃げていき、わたしはそこに足を踏まえることができないように思われる。そして「それが

何になる」という破滅的な態度がわたしの存在全体を支配する。それらは一過的な瞬間でしかなく、またそうであることをわたしも望むが、しかしながら、このような瞬間は存在するのだし、そして時間の特殊な様相を表現しているのである。(TV 20)

ミンコフスキーはこのように、「疲労、失望、落胆」(TV 20) といった一時的な現象もまた、たとえすぐに過ぎ去ってしまうものであるとしても、生の様相の一つであると述べる。すなわち、「わたし自身の生命も、わたしの周りに流れる生命」も、どちらも「逃げていく」(TV 20) 時間経験において、そうした一時的な現れ方をする生の様相としての「現象の領域」に注目し、「時間」についての考察を深めようとする。

6. ジャネの「作話」

こうした過程を経てミンコフスキーは、「生きられる現在」という治癒的な意味での「接触」を見出していくのだが、これは、「統合し、展開し、光を放射する」(TV 155) ような「現在」であるという。ミンコフスキーは、「接触」概念とジャネの「現実化機能」、及びベルクソンの「生への注意」とを関連させながら論じていくのだが、本節では、「ミンコフスキーによるベルクソン受容」という主題を論じる上で特に重要なジャネの「現実機能」と「作話」を巡る議論を取り上げたい。

ミンコフスキーは、自身の「生きられる接触」とベルクソンの「生への注意」、ジャネの「現実機能」の関連について次のように述べる。

自閉の概念を手がかりにして、わたしは、現実との生きられる接触の喪失を精神分裂病の本質的な障害とした。(中略) この概念は、ベルクソンの「生への注意」と少なからず共通するものを持ち、また他方では、ピエール・ジャネの「現実化機能」にも似ている。したがってそれは、こういう表現が許されるならば、現代の哲学と精神病理学の諸傾向の中軸に位置する観念であると言えるだろう。(TV 256)

ミンコフスキーはここで、「生きられる接触」について、これが「自閉」概念とその克服の課題に向けて論じられたものであり、ベルクソンの「生への注意」やジャネの「現実化機能」と類似したものであるとする。このようにしてミンコフスキーは、「精神分裂病」の患者において「分裂性」による「自閉」を通して現実に対して注意を払わないことが、創造的行為に繋がることを認めつつ、かつ、現在における「停止する場所」を取り戻すという複合的な課題に、「作話」を経由した「接触」概念の検討から取り組もうとするのである。この点について確認してみよう。

ミンコフスキーは、『生きられる時間』第一章の第四節において、ジャネの記憶理論を要約し、ジャネの理論に則りながら、「現在」について検討する。ジャネは、「抽象的な知性は、思考の最も低次の段階にあり、意志、注意、現在の感情 (le sentiment du présent) といった現実機

能 (la fonction du réel) であるところの高次の段階が消失したときにも残存する」¹⁷とし、「現在の感情」を含む「現実機能」を、精神の諸機能の最も高次のものとして位置づける。ここでわれわれは、ミンコフスキーがジャネの記憶理論にしたがうことによって、「抽象的な知性」の能力が低次のものであるとしたジャネの図式を再び逆転させ、これが「現実機能」や「生きられる現在」という土台の上に立つことによって初めて可能になる、遠くへ行くための能力であるととらえる点に注目する。そして、ジャネが高次のものとした「現実機能」について、これが能力の頂点ではなく、土台であり「支え」であるからこそ、どのような場合においても「後から」回復可能であるとするミンコフスキーの主張を明確化したい。

まずは、ミンコフスキーによるジャネの要約を見てみよう。ミンコフスキーはまず、ジャネの言葉を引用しながら、「現在」とは以下のような複雑で困難な行為であると記述する。

「これがわたしの現在だ」とわたしが言うとき、わたしは自分自身にであれ、他人にであれ、わたしがまさに行為しているときに、そのわたしの行動について物語をしているのに他ならないのである。こうして現在とは、われわれが行為しつつあるあいだに、その行動についてわれわれがする話である。現在とは物語 (narration) と行動とを結合する特殊な行為である。(中略) 現在は記憶を再びより堅固なものにし、それを行動の実践的領域に再び連れ戻すのである。現在はこのように複雑で困難な行為である。(TV 29-30)

このように、ミンコフスキーにとって「生きられる現在」は、特殊な「行為」であり、また「状態」(TV 30) であるとされる。なぜなら、われわれは「生きられる現在」を「これがわたしの現在だ」と自分自身に語り聞かせることによって形成するからである。では、この点についてジャネの記述から確認してみよう。ジャネは『記憶の進化と時間の概念』というコレージュ・ドゥ・フランスの1927年から1928年の講義において、次のように述べている。

現在化 (présentification) は最初の基礎的な作用を必要とする。それは、現在の構成である。現在の概念は非常に複雑なものである。現在は、われわれの構成員たちとともに実際に行動すること、言葉の上だけではない本物の行為を成すこと、すなわち真の行為を行うことと、同時に、行為があたかも為されていないかのように話 (récit) をするという二重の作用において構成される。話における記憶上の行為と、実際の振る舞い、これら二つの行為を混合するのである。われわれは、講義 (le cours) を聞きながら、一つの流れ (un cours) に立ち会うだけでなく、同時に、われわれは、われわれ自身を聞くのである。「わたしはコレージュ・ドゥ・フランスの講義に出席している。」このフレーズは一つの話である。この話は一日の終わりには意義を持たないが、誰かに会ったとき、あなたがすぐにそうしたときには、一方で、あなたはあなたの現在を成す。なんと特異な行動であろうか¹⁸。

ここでジャネは、「現在化」という行為が、前提としての「最初の基礎的な作用」であるところの「現在の構成」を必要としつつ行われるという矛盾を述べる。すなわち「現在化」は、「一

つの流れ」に立ち会いながら、同時に、それがわれわれ自身による言葉を聞くという、ねじれた時間の上にしか成り立たないとする。ジャネにとってこうしたねじれや「混合」は、特異で、複雑で、困難であるとしか言いようのないものである。このように「現在」は、ジャネにおいて、「基礎」であるにも関わらず、それが未だにないものであるということが示唆される。ジャネは、「現在」を構成するこうしたねじれを可能にする、能力の複雑さや豊かさに着目するからこそ、これを土台ではなく、「高次のもの」であるとみなしたと考えられる。

これに対しミンコフスキーは、こうしたジャネの記憶の発達についての理論を支持し、この機能をわれわれの「支え」でありながら、時間をかけて「後から」構築されるものであることを強調する。ここで鍵となるのは、ジャネの記憶理論における、自閉した「作話」の概念である。まずミンコフスキーは、閉じられた個々の世界で作られる「作話」の作成からしか、共通の「現在」を含み込んだ「生きられる現実」が構成され得ないとする。

記憶の問題に戻るならば、われわれはいまや二種類の記憶を区別しなければならないだろう。一方は作話（fabulation）の記憶であるが、それにおいてはすべてが相対的であり、以前と以降とはいかなる現在においても結合されていない。またこのことからして、それは思いのままに引き延ばすことができる。もう一方は堅固な記憶であるが、これは一つの本質的な作用、すなわち、現在を構成する作用によって性格づけられており、それは現在を考えに入れることを強制されている。(TV 30)

ミンコフスキーは、ジャネにおける「作話」とこれに挿入される「現在」に注目することによって、記憶を二つのものに分ける。一つ目は「作話」の記憶であり、「現在」と関わりのない記憶である。「作話」は、年代的な順序や「遊戯」(TV 29)の要素を持ち、これだけで完結することができるし、どのようにも引き伸ばすこともできる、柔らかい記憶である。二つ目の記憶は堅固な記憶であり、「現在」という最初の点を強制された記憶である。

以前と以降の関係は全く相対的なもので、どの「以前」も、別の「以前」との関係においては、「以降」であり得る。作話の基礎にあるのはまさしくこの相対性である。この相対性を抹殺するためには、一つの絶対的な点、過去と未来とを、一義的な仕方で、それに対して配することができるころの、いうなれば一つの限界を導入することが必要となった。このようにして現在の概念が発達したのである。(TV 29)

「作話」の記憶は、内部に前と後という順序を持つが、この順序はどこにでも挿入することが可能であり、相対的である。一方で、後者の堅固な記憶は、ある絶対的な点を挿入された記憶である。これに加えてミンコフスキーは、この「現在」の絶対的な点について、「不在者」や、その塊として定義される「過去」との関連のなかで発達したものであると考える。すなわちここで、1)「現在」が未だ挿入されていない自己自身で完結した「遊戯」としての「作話」と並行して、2)すでに「現在」という不在の点を含み込んでいる「作話」の二重性が提示されるのである。

記憶の起源は、人間は、群れを成して生活するある種の動物たちがするように、野営地の外に見張りを立てるようになることから引き出すことのできるすべての利益を発見したときから、発達し始めたところの一つの社会的な行為にある。この行為は不在者に言葉によって警告したり、命令を伝達したりする能力を明らかに含んでいる。話 (récit) はこのように記憶の基礎となる行為である。この行為はいまや進化の過程を通じて次第に複雑化していく。それはまずもって、不在者に、もはや単純な命令ではなく、状況を伝達することを目的にする記述を生むであろう。(TV 28)

ミンコフスキーによるジャネの記憶理論の解釈によれば、記憶の起源は、「不在者」への警告や命令のための「話」として形成された社会的な行為にある。こうした「話」は、まず、共同体内部における不在者に向けて形成され、次に、「過去の消失 (disparition du passé)」というまとまった不在を含むようになると、「物語 (narration)」となる¹⁹。そして、「以前」と「以降」という配列を含んでいくことによって、これ自体が目的として自閉するような「作話」となり、実際の行動に回帰しながら、「現在」を形成するに至る。ここで重要なのは、「現在」が、「作話」に「後から」付け加えられるとされる一方で、「不在者」として最初から含み込まれていたともみなされる点である。すなわち、共通の「現在」は、「後から」構成されるという側面と、これがどのようなときにもすでに「作話」に支えとして含み込まれているという二重性を持つ。

このようにしてミンコフスキーは、ジャネの理論にしたがいながら、その場にいるものといないもの、構成されるものと構成するものの二重化や混合状態を、「接触」という相互性のなかでとらえていく。そして、病においてこの「現在」が失われているように見えたとしても、これをわれわれと世界の「根底の連帯 (solidarité foncière)」²⁰を根拠として、相互的な「接触」のなかで、後から構築し直せると考えるのである。

7. 『二源泉』におけるベルクソンの「作話」

本稿ではここまで、ミンコフスキーがベルクソンから多くを負いながらも、その思想を精神病理学に取り込むにあたって、「空間」や「停止」概念のなかに積極的な側面を見出したことを確認した。「時間」や「流れ」に対して、「空間」や「停止」といったものの積極性を強調することは、ミンコフスキーにとって、プロイラーから受け継いだ「同調性」の重要性を強調しながらも、「分裂性」の創造性を確保しようとする目論見の上にあったと言える²¹。すなわちミンコフスキーは、「分裂性」や「知性」の働きについて、この過剰が「精神分裂病」における「病的合理主義 (rationalisme morbide)」や「病的幾何学主義 (géométrisme morbide)」²²に繋がることに注意を促しながらも、その創造的な側面を救い出そうとするのである。こうした「分裂性」の肯定は、プロイラーとミンコフスキーを隔てる大きな転換点となっている。

では、本稿で追って来たミンコフスキーによるベルクソン受容においては「空間」や「停止」はどのように機能しているのだろうか。われわれは本稿において、ミンコフスキーが「空間」

や「停止」を取り上げ直すことによってベルクソンから離れてしまったことを確認した。だが、果たして本当にミンコフスキーはこの点においてベルクソンから離れることができていたのだろうか。最後にこの問題について検討するために、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』(1932年)における「作話」についての議論を確認したい。

ベルクソンは『二源泉』の第二章「静的宗教」において、「不条理な迷信が、どうして理性的存在の生活を支配し得たのか、また今なお支配し得るのか」²³という問いを立て、心理学が、科学上の発見や発明、及び芸術上のさまざまな業績を可能にするような表象を「想像力」の領域に分割していることを指摘しながら、これらの表象を出現させる作用を、「作話、想話 (fiction, fabulation)」と呼ぶことを提案する²⁴。そして、小説や戯曲、神話もまたこの想像力の機能に属しているとしながら、次のように述べる。

作話は、それが効力を持っているときには、初期幻覚 (hallucination naissante) のようなものである、という点に注目しなければならない—すなわちそれは、本来的に知的な能力であるところの判断力と推理力に逆らうことができるのである²⁵。

このようにベルクソンは、「迷信」や「作話」が、われわれの知性に逆らってわれわれに「幻覚」のように効力を発揮し得るという事実を認めながら、これが何の役に立っているのかを考察しようとする。そしてこの「作話」のなかに「宗教」をも含めながら、次のように述べる。

どうしてそれ〔宗教〕は、消滅する代わりに、単に変形しただけなのだろうか。知性が形相と質料の間に残っていた、実際に危険であるような隙間を埋めるために科学が到来したにも関わらず、どうして宗教は生き残っているのだろうか。それは、生命が表現する安定の必要の下に、すなわち種の保存に他ならないこうした停止、もしくはむしろこの旋回 (tournoiement) のなかに、前進の運動への要請、進む力の名残、生の躍動があるからではないだろうか²⁶。

ここでベルクソンは、「作話」としての宗教による「停止」や「旋回」のなかにこそ、進む運動や進む力の名残、言い替えれば「生の躍動」を読み取る。われわれには、この点に留意した上で、ベルクソンにおける「停止」や「旋回」としての「作話」について、『二源泉』において分析するという課題が残されているのではないだろうか。

ベルクソンはこの少し前で、次のように述べていた。

幻覚的イメージ (images fantasmatiques) は正しく本能の代わりに精神のなかに出現する訳ではないにしても、上に考察した傾向はひとの本能 (instinct) であると言っても良い。そうした幻覚的イメージは、本能に帰属したかもしれなかつたような、そして、知性を欠如した存在にあっては、疑いなく本能に帰属すると思われる、一つの役割を演じる²⁷。

ベルクソンはここで精神にとっての「作話」を、「幻覚的イマージュ」と言い換え、さらにはこれを「本能」の役割に「帰属したかもしれない」ものであるとする。ここで「本能」であると言い切ることができないのは、昆虫と比較した場合に人間においては「知性」が働いているため、この本能が「潜勢的 (virtuel)」²⁸なものに留まっているとみなされるからである。この方向に議論を突き詰めていくと、「潜勢的」なままである「本能」と、昆虫においてそうであるように「現実的 (réel)」²⁹である「本能」とを「相互補完的 (complémentaire)」³⁰であるような関係にならしめる分岐点が想定されるようになる。その結果として導かれるのは、昆虫の社会と人間の社会、本能的社会と知性的社会、ひいては本能と知性そのものが、互いに「一対 (pendant)」のものとなり、「補い合う」³¹状態である。

したがって、「作話」や「迷信」、「宗教」といった「初期幻覚」は、ベルクソンにおいては、「知性」を補うものであり、障害であることによってこれを支えることによって、われわれにとって不可欠のものである。

8. 結論と展望

上述のベルクソンの「作話」と、ジャネの「作話」を比較しながら、ミンコフスキーによるベルクソン受容について結論を述べたい。ジャネは「作話」について、これが共同体内部の不在者のための「話 (récit)」に起源がある社会的な行為であるとみなす。「話」は、「過去の消失」というより広がりのある不在を含むようになると、「物語 (narration)」となる。そして、前や後ろといった配列を含むことで「作話」となり、実際の行動に接続することで「現在」を形成するとされる。ここで思い起こしたいのは、「現在」が「作話」に「後から」付け加えられるとされる一方で、「不在」として初めから含み込まれていたともみなされる点である。すなわち、われわれにとっての共通の現在は、「後から」構成されるという側面と、初めから「作話」に含まれるというねじれを持つ。すなわち「作話」の構成そのものについて、われわれの「現在」が、これを再構成したときにはすでにわれわれのなかに初めから存在していたことを示すための不可欠なプロセスであるとミンコフスキーとジャネは考えていたと言える。ではベルクソンにおいてはどうか。ベルクソンは『二源泉』において「作話」を含む「本能」を、「知性」の相互補完物であるとし、これが知性的社会を「潜勢的」に支えるものであるとみなした。もちろん、『二源泉』においてベルクソンが目指したのは「作話」が含まれるような静的宗教ではなく動的宗教であり、さらには閉じた社会ではなく開いた社会であるが、後者に至ろうとする過程のなかで、ジャネの議論を引き継ぎながら、「作話」が確かな役割を演じているのではないだろうか。

こうした観点からミンコフスキーによるベルクソン受容を整理すれば、ミンコフスキーは時間と空間、直観と推論的思惟の両方を並立させようとしていたのであり、ベルクソンが相互補完的であるとした「本能」と「知性」もまた、この関係性に当てはまると言える。したがって、ミンコフスキーはベルクソンから、こうした相互補完的思考を受容したと結論づけることができる。ミンコフスキーは、ベルクソンに忠実に対の思考を押し進め、ベルクソンが批判した「空

間」概念ですら、時間の経験に組み込んでしまったのである。

最後に展望として、こうしたベルクソン受容から帰結する、ミンコフスキーが構想した「精神分裂病」の相互補完的な治療法の概略を描いてみたい。師であるブロイラーが「精神分裂病」が回復不能な病であるとみなしたのに対し、ミンコフスキーは回復の可能性を認めていた。この点に関し、ミンコフスキーは次のように述べている。

〔精神分裂病の基本障害である〕現実との生きられる接触の喪失という概念は、この接触の全て、あるいは少なくともその一部分の回復の可能性を含む概念である³²。

ブロイラーの立場が当時主流なものであったの対し、ミンコフスキーの立場は例外的なものであった。しかしながらミンコフスキーは、そもそもブロイラーが「早発性痴呆 (Dementia Praecox)」から「精神分裂病 (Schizophrenie)」へと名称を変更したこと自体が、治療可能性を拡大する目的があったとみなしていたのである。われわれはこうした両者の立場の違いもまた、ミンコフスキーによるベルクソン受容と関係性があると考ええる。この点について明らかにするために、ミンコフスキーが使用する「共感 (sympathie)」に注目したい。ミンコフスキーは「共感」の現象について次のように述べる。

われわれは共感のうちに、現実との生きられる接触の本質的特徴を、苦もなく見出すことができる。共感は一時的であることはできないだろう。そのうちには常に持続がある。そしてこの持続のうちには、相並び完全に調和して流れる、いわば二つの生成がある³³。

ここには、ミンコフスキーがベルクソンの「共感」と自身の精神病理学を結びつけている点が示唆されている。ミンコフスキーは「現実との生きられる接触」の特徴が「共感」のなかにあるとみなすのであり、ここから、ミンコフスキーが「精神分裂病」からの回復可能性を述べた根拠として、われわれにおける「共感」の回復を見込んでいたと考えられるのである。しかしながら「共感」を喪失したとき、われわれはどのようにしてこれを取り戻すことができると彼は考えていたのだろうか。

この問いについて考察するために、ベルクソンの「共感」概念を振り返りたい。ラブジャードは論文「ベルクソンにおける直観と共感」において、ベルクソンの「共感」概念を、「直観」と比較しながら次のように定義している。

共感直観の同義語ではないが、直観の欠くことのできない補語 (complément) として現れる。共感によって、生命と物質は精神になり、直観によって、精神は自らの持続を見出す³⁴。

ラブジャードはこのように、ベルクソンにおいては「直観」と「共感」が補足的な関係にあるとみなす。すなわちラブジャードは、「直観」と「共感」を「知性」と「本能」が互いに切り離せないように、ベルクソンのテキスト内で一方が現れてくるときには一方が裏で支えるよう

な関係にあるとするのである³⁵。

この相互補完性を念頭に置きながら、メルロ＝ポンティによるベルクソンの「直観」概念の解釈を読んでみよう。メルロ＝ポンティは『心身の合一』において、ベルクソンの「直観」概念が二つの面を持っている点に注目する。1) 合致としての直観、2) 了解としての直観。後者の意味での直観をより重視しながら、メルロ＝ポンティは次のように述べる。「直観は、いまや意味の力によって記号と事実を結びつける働きとなる。共感とはもはや受容ではなく了解なのである。」³⁶ここで、メルロ＝ポンティは直観（共感）の能動的な側面を強調する。すなわち、われわれは共感を何の苦勞もなく受け取るのではなく、困難とともに手に入れるのである。

ここから、いかにして「共感」を取り戻すのか、という問いに対し、次のように答えることができるだろう。「共感」とは「直観」と一体のものであり、多くの困難とともに得るものである。だからこそ、もう一度メルロ＝ポンティが指摘した第一の面を確認する必要がある。ベルクソンは合致としての「直観」について、次のように証言していた。

非反省的な共感や反感はしばしば予見的であり、人間の意識の相互浸透が可能であることを証言している。ここから、心理的な内的浸透があると言えるだろう³⁷。

「共感」はメルロ＝ポンティが述べるように困難な了解である。「共感」が困難であるからこそ、ベルクソンが証言する内的浸透であり合致としての「共感」の現象を、すでにそこにあるものであり、かつこれから再構成するものであるような、ミンコフスキーが見出した「現在」として解釈しなければならないのではないだろうか。

再びミンコフスキーに戻りたい。ミンコフスキーはベルクソンの「知性」と「本能」の相互補足性を受容した上で、「精神分裂病」の治療方法を模索することと「共感」の現象の存在を証言することを並行して進めようとしていた。上述したように、メルロ＝ポンティはベルクソンの「直観」（「共感」と一体であるところの）の二つの側面には差異があるとする。しかしながらミンコフスキーにとっては、これら二つの側面は二者択一的ではない。言い換えれば、ミンコフスキーは「共感」を、1) すでに存在するわれわれの支えであるとともに、2) 努力によって後から獲得されるものであるとみなしていた。ここには彼の理論的なねじれが現れているだろう。そして、こうしたねじれは、本稿で論じてきたように、彼が「作話」における「現在」の再構成において組み立てた理論と一致している。ミンコフスキーは、「作話」における「現在」の形成や「共感」がねじれのうえに成立しているものであると考えていたのであり、われわれには、共同体における「作話」が示す「現在」や「共感」の再構築の可能性について、今後も詳細に分析するという課題が残されている。またその際には、ミンコフスキーが「空間」のなかに見出す時間の再構成の契機としての「反省」や「観想」について、十分に留意しなければならないだろう。

- ・本稿は博士論文「ウジェーヌ・ミンコフスキー研究―分裂性と同調性」（2016年3月、筑波大学）の一部を改稿したものである。
- ・また、2016年9月9日のベルクソン哲学研究会（於：学習院大学）で口頭発表した原稿「ウ

ジェーヌ・ミンコフスキーのベルクソン受容」、及び2016年11月11日の国際シンポジウム『物質と記憶』を診断する—ベルクソンと脳・時間・記憶の諸問題』若手研究セミナー（於：明治大学）で発表した“Bergson's 'sympathy' in E. Minkowski”に修正を加えたものを含む。

1 なお、本稿ではミンコフスキーが使用したプロイラーの「分裂性」概念との連続性を明確化するために、「統合失調症」に対し「精神分裂病」という訳語を使用する。

2 父オーギュスト（Auguste）の4人の息子の次男としてサンクトペテルブルクに生まれる。一人の妹がいたが彼女は幼くして亡くなった。父の職業について、ウジェーヌの娘であるジャンヌ（Jannine Pilliard-Minkowski、ポーランド語での名はジャンカ〔Janika〕）は、「穀物商」を営んでいたとし、孫であるマルク（Marc Minkowski）は、「銀行家」であったと述べている。（Jeannine Pilliard-Minkowski, *Eugène Minkowski 1885-1972 et Françoise Minkowska 1882-1950 : éclats de mémoire*, Paris, L'Harmattan, 2009. 及び Marie-Aude Roux, « Marc Minkowski, une histoire polonaise », *Le Monde*, le 23 décembre 2008 à 18h14, mis à jour le 23 décembre 09h50.）またアレンによれば、オーギュストの父であり、ウジェーヌの祖父カジミール（Casimir）は、ポーランドのブイドゴシュチュ（Bydgoszcz）出身の下級貴族だったという。カジミールが飲酒と女性関係によって資産を使い果たしたなかで、13人の兄弟姉妹の末子であったオーギュストは、必死に働いて資産を蓄えたと伝えられている。（D. F. Allen, « Le Rationalisme morbide, la plusionscopique et le verbe Etre », Eugène Minkowski, *Au-delà du rationalisme morbide*, Paris, Harmattan, 2000, p. 235-256.）さらに、4人兄弟の下の子のうち、1888年生まれのポール（Paul〔元の名はパヴェウ（Pawel）〕）はスイスで外交官となり、1891年生まれのアナトール（Anatol〔元の名はトレク（Tolek）〕）はポーランドで軍人となった。アナトールはカティンの森事件と呼ばれる大量殺戮において1940年ごろに殺害された可能性が高いと、ウジェーヌの孫であり2008年からワルシャワのオケーストラ「シンフォニア・ヴァルソヴィア」の音楽監督となったマルクが『ル・モンド』紙のインタビューに答えている（Marie-Aude Roux, op. cit.）。アナトールの息子であり、1914年に生まれたジャン・ミシェル（Jan Michael）の記録についても確認することができる。ジャン・ミシェルは、ワルシャワで育ち、ステファン・バトリ大学（現在のリトアニア、ヴィリニウス大学）で学位を取得した後、電子工学の専門家としてワルシャワの研究機関に在籍する。第二次世界大戦中、ロシア軍によってモレンスクの強制労働キャンプに送られ、後に捕虜交換によってドイツ軍に拘束された。1945年の終戦時に米軍による解放を経て、1950年からジョーンズ・ホプキンス大学の研究所に勤め、同大学で博士号を取得し、1991年に亡くなっている。ジャン・ミシェルの生涯と講義をまとめたものとして、以下の著作がある。（Jan Michael Minkowski, *Through three wars : The memoirs of Jan Michael Minkowski*, edited by Ann Shreve, Louisville, Gateway Press, 1991.）

3 フラニアは、結婚の際にウジェーヌの性に合わせたか、その際男性形の「ミンコフスキー」の女性形である「ミンコフスカ」に苗字を変更するとともに、ファーストネームもまたフランス語名「フランソワーズ」に変更している。

4 このときミンコフスキーが助けた子どもたちからは、未だに孫のマルクのもとに手紙が届くという。（Marie-Aude Roux, op. cit.）

5 パリでは、ロチルド病院（Hôpital Rothschild）やアンリ＝ルーセル病院（Hôpital Henri-Rousselle（サン＝タンヌ精神病院複合施設の一部））に勤めていたとされる。（エドワード・ショーター『精神医学歴史事典』江口重幸、大前晋監訳、東京、みすず書房、2016年、360頁参照。）なお、サン＝タンヌ病院で働いていた当時ウジェーヌは、当時インターンとして採用されていたため、「フランスで最も年老いたインターン」と呼ばれていた。（Jean Garrabé, « Évocation de ce temps où naissait l'Évolution psychiatrique. À propos de « Eugène Minkowski 1885-1972 et Françoise Minkowska

- 1882-1950 » de Jeannine Pilliard-Minkowski », *L'Évolution psychiatrique*, vol. 75, n° 3, 2010, p. 511.)
- 6 Eugène Minkowski, "Bergson's Conceptions as applied to Psychopathology," translated by F. J. Farnel, *Journal of Nervous and Mental Disease*, 63, 1926, p. 553-568. (E. ミンコフスキー、「精神病理学に適用されたベルグソンの思想」、越賀一雄訳、『現代精神医学の礎 I—精神医学総論』所収、松下正明、影山任佐監訳、東京、時空出版、2012年、356-376頁。)
- 7 Eugène Minkowski, « La schizophrénie et la notion de maladie mentale (sa conception dans l'œuvre de Bleuler) », *L'Encéphale*, vol. 16, n°5, 1921 p. 247-257.
- 8 *Ibid.*, p. 249.
- 9 Eugène Minkowski, *La schizophrénie : psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes*, Paris, Payot, 2002, p. 129.
- 10 「核」や「層」という語は使用されなくなるものの、『生きられる時間』においても、「表面 (surface)」と「底 (fond)」、あるいは「表面」と「深さの次元 (dimension en profondeur)」の対は使用され続けている。「深さの次元」は、『生きられる時間』では「無意識」とも言い換えられ、この概念によって精神分析の倫理的側面が強調されるとともに、著作の後半では「暗い空間の精神病理学」として展開されていく。(Eugène Minkowski, *Le temps vécu : études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris, PUF, 2005, p. 46. 以下で引用する際にはTVと略記する。)
- 11 Eugène Minkowski, « La schizophrénie et la notion de maladie mentale (sa conception dans l'œuvre de Bleuler) », p. 254-255.
- 12 João M Vaz, "Memory as persona non grata in the work of Eugène Minkowski: a historical approach," *History of Psychiatry*, 27(3), 2016, p. 1-12.
- 13 プロイラーが「精神分裂病」になり易い傾向として「分裂性」を、躁鬱病になり易い傾向として「同調性」を主張したのは1922年の論文による。(Eugen Bleuler, « Die Probleme der Schizoidie und der Syntonie », *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 78, 1922.)
- 14 Theodor Ziehen, translated by C. C. Van Liew and Otto Beyer, *Introduction to physiological psychology*, London, Sonnenschein, 1892, p. 21-22.
- 15 Henri Bergson, *Matière et mémoire : essai sur la relation du corps à l'esprit*, Paris, PUF, 1965, p. 220.
- 16 *Ibid.*, p. 220-221.
- 17 Pierre Janet, *Les obsessions et la psychasthénie*, Paris, Félix Alcan, 1903, p. 461.
- 18 Pierre Janet, *L'évolution de la mémoire et de la notion du temps : leçons au Collège de France 1927-1928*, Paris, L'Harmattan, 2006, p. 272.
- 19 *Ibid.*, p. 12.
- 20 Eugène Minkowski, *Écrits cliniques*, Textes rassemblés par Bernard Granger, Ramonville-Saint-Agne, Éditions érès, 2002, p. 141.
- 21 この点については以下で論じた。(佐藤愛、「ウジェーヌ・ミンコフスキーにおける浸透あるいは分有の原理」、『フランス哲学・思想研究』、第20号、2015年、180-189頁。)
- 22 ミンコフスキーが「病的合理主義」の例にあげるのは、ある30代の男性教師の症例である。彼は哲学的な問題に関心を持っているが、他者によって自身の思考が歪められるのを避けるために、哲学書を読まない。また彼は自分自身の声からのみ暗示を受けようとするが、頭のなかは空っぽで、声は死んだ幽霊のもののようにであると述べる (*La schizophrénie*, p.127)。他方、「病的幾何学主義」の例としてあげられている男性患者は、あらゆる事柄が数学によって説明できると考える。例えば彼は、医学や性的な事柄も数学から論じることが可能であると、最も魅力的な身体は球形をしているはず

だと述べる (TV 261)。

²³ Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, Paris, PUF, 1999, p. 110.

²⁴ *Ibid.*, p. 111.

²⁵ *Ibid.*, p. 112.

²⁶ *Ibid.*, p. 115.

²⁷ *Ibid.*, p. 114.

²⁸ *Ibid.*, p. 114.

²⁹ *Ibid.*, p. 114.

³⁰ *Ibid.*, p. 114.

³¹ *Ibid.*, p. 122.

³² Eugène Minkowski, *La schizophrénie*, p. 269.

³³ TV 61

³⁴ David Lapoujade, « Intuition et symapathie chez Bergson », *Eidos*, n° 9, 2008, p.31.

³⁵ こうしたラブジャードの「直観」と「共感」の関係性の解釈について、田中悠介は論文「ベルクソンの直観概念：共感と神秘的経験」のなかで、「この2つの概念を分離するのは、概念としてよりも作用としての違いを抽出するためであり、内的な直観から外的なものの直観へといかにして橋渡しをするかという問題のためである。ここで、共感とは直観の成立する可能性を表す。すなわち、共感することは直観の可能性を拡張するとして、精神的なもの、内的直観と同質なもの（アナロジーの成立するもの）を外部に認めることを意味する」と説明している。すなわち、田中によればラブジャードは「共感」について、「直観」を内的なものから外的なものに拡大するために不可欠な働きであるとみなしているという。(田中悠介、「ベルクソンの直観概念：共感と神秘的経験」、『待兼山論叢 哲学篇』、第46号、2012年、p.1-15.)

³⁶ Maurice Merleau-Ponty, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, notes recueillies et rédigées par Jean Deprun, Paris, J. Vrin, 1978 (1^{ère} édition, 1968), p. 114.

³⁷ Henri Bergson, *La Pensée et le mouvant*, Paris, PUF, 1938, p.28.